忘れ形見

若松賤子

How kind, how fair she was, how good,
I cannot tell you. If I could,
You too would love her.
Procter〟:〝The Sailor Boy〟.

ミス、プロクトルの〝The Sailor Boy〟という詩を読みまして、一方ならず感じました。どうかその心持をと思って物語ぶりに書綴（かきつづ）って見ましたが、元より小説などいう

べきものではありません。

あなた僕の履歴を話せって仰(おっしゃ)るの？　話しますと
も、直(じっ)き話せっちまいますよ。だって十四にしかなら
ないんですから。別段大(たい)した悦(よろこび)も苦労もした事がな
いんですもの。ダガネ、モウ少し過ぎると僕は船乗(ふなのり)に
なって、初めて航海に行(ゆ)くんです。実に楽(たの)しみなんです。
どんな珍しいものを見るかと思って……段々海へ乗出
して往(ゆ)く中(うち)には、為朝(ためとも)なんかのように、海賊を平(たい)らげ
たり、虜(とりこ)になってるお姫さまを助けるような事があ
るかも知れませんからね。それから、ロビンソン、ク

ルーソーみたように難船に逢(あ)って一人ツきり、人跡(じんせき)の絶えた島に泳ぎ着くなんかも随分面白かろうと考えるんです。

　これまでは、ズット北の山の中に、徳蔵おじと一処にいたんですが、そのまえは、先(せん)の殿様ね、今では東京にお住いの従四位様(じゅよいさま)のお城趾(しろあと)を番していたんです。足利(あしかが)時代からあったお城は御維新のあとでお取崩(とりくず)しになって、今じゃ塀(へい)や築地(ついじ)の破れを蔦桂(つたかづら)が漸(ようや)く着物を着せてる位ですけれど、お城に続いてる古い森が大層広いのを幸いその後鹿(しか)や兎(うさぎ)を沢山にお放しになって遊猟場(ゆうりょうば)に変えておしまいなさり、また最寄(もより)の小高見(こだかみ)へ

別荘をお建てになって、毎年秋の木（こ）の葉（は）を鹿ががさつかせるという時分、大したお供揃（ともぞろい）で猟犬や馬を率（ひか）せてお下（くだ）りになったんです。いらっしゃれば大概二週間位は遊興をお尽しなさって、その間は、常に寂（ひっ）そりしてる市中が大そう賑（にぎやか）になるんです。お帰りのあとはいつも火の消（きえ）たようですが、この時の事は、村のものの一年中の話の種になって、あの時はドウであった、コウであったのと雑談（ぞうだん）が、始終尽ない位でした。

　僕はまだ少（ちい）さかったけれど、あの時分の事はよく覚えていますよ。サアお出（いで）だというお先布令（さきぶれ）があると、昔堅気（むかしかたぎ）の百姓たちが一同に炬火（たいまつ）をふり輝（て）らして、我先（われさき）

と二里も三里も出揃(でぞろ)って、お待受(まちうけ)をするのです。やがて二頭曳(にとうびき)の馬車の轟(とどろき)が聞えると思うと、その内に手綱(たづな)を扣(ひか)えさせて、緩々(ゆるゆる)お乗込になっている殿様と奥様、物慣(ものなれ)ない僕たちの眼にはよほど豪気(ごうぎ)に見えたんです。その殿様というのはエラソウで、なかなか傲然(ごうぜん)と構えたお方で、お目通りが出来るどころではなく、御門をお通りになる度(たび)ごとに徳蔵おじが「こわいから隠れていろ」といい〳〵しましたから、僕は急いで、木の蔭(かげ)やなんかへかくれるんです。ですがその奥さまというのが、僕のためにはナンともいえない好(い)い方で、その方の事を考えても、話にしても、何だか妙に嬉(うれ)し

いような悲しいような心持がして来るんです。美人といえばそれまでですが、僕はあんな高尚な、天人（てんにん）のような美人は見た事がないんです。先下々（まずしもじも）の者が御挨拶（ごあいさつ）を申上ると、一々しとやかにお請（うけ）をなさる、その柔和でどこか悲しそうな眼付（めつき）は夏の夜の星とでもいいそうで、心持俯向（うつむ）いていらっしゃるお顔の品（ひん）の好さ！　しかし奥様がどことなく萎（しお）れていらしって恍惚（うっとり）なすった御様子は、トント嬉（うれし）かった昔を忍ぶとでもいいそうで、折ふしお膝（ひざ）の上へ乗せてお連（つれ）になる若殿さま、これがまた見事に可愛（かあい）い坊様なのを、ろくろくお愛しもなさらない塩梅（あんばい）、なぜだろうと子供心にも思いました。

近処（きんじょ）のものは、折ふし怪（け）しからぬお噂（うわさ）をする事があって、冬の夜、炉（ろ）の周囲（まわり）をとりまいては、不断（ふだん）こわがってる殿様が聞咎（ききとが）めでもなさるかのように、つむりを集めて潜々声（ひそひそごえ）に、御身分違（おみぶんちがい）の奥様をお迎えなさったという話を、殿様のお家柄にあるまじき瑕瑾（きず）のようにいいました。この噂を聞いて「それは嘘だ、殿様に限ってそんな白痴（たわけ）をなさろうはずがない」といい罵（ののし）るものもありましたが、また元の奥様を知っていた人から、すぐに聞（きい）たッて、一々ほんとうだといい張る者さえあったんです。その話というはこうなんです。

人の知らない遠い片田舎に、今の奥さまが、まだ

新嫁でいらしッたころ、一人の緑子を形見に残して、契合た夫が世をお去りなすったので、跡に一人淋しく侘住いをして、いらっしゃった事があったそうです。さすがの美人が憂に沈でる有様、白そうびが露に悩むとでもいいそうな風情を殿がフト御覧になってからは、優に妙なお容姿に深く思いを寄られて、子爵の御名望にも代られぬ御執心と見えて、行つ戻りつして躊躇っていらっしゃるうちに遂々奥方にと御所望なさったんだそうです。ところがいよいよ子爵夫人の格式をお授けになるという間際、まだ乳房にすがってる赤子を「きょうよりは手放して以後親子の縁はなきも

のにせい」という厳敷(きびしき)お掛合(かけあい)があって涙ながらにお請をなさってからは今の通り、やん事なき方々と居並(いなら)ぶ御身分とおなりなさったのだそうです。ところがあの通りこの上もない出世をして、重畳(ちょうじょう)の幸福と人の羨(うらや)むにも似ず、何故か始終浮立ぬようにおくらし成(なさ)るのに不審を打(うつ)ものさえ多く、それのみか、御寵愛(ごちょうあい)を重ねられる殿にさえろくろく笑顔をお作りなさるのを見上た人もないとか、鬱陶(うっとう)しそうにおもてなしなさるは、お側(そば)のチンも子爵様も変った事はないとお附(つき)の女中が申(もうし)たとか、マアとりどりに口賢(くちさが)なく雑談をしました。徳蔵おじがこんな噂(うわさ)をするのを聞(きき)でもしよう

もんなら、いつも叱(しか)り止(とめ)るので、僕なんかは聞(きい)ても聞流しにしちまって人に話した事もありません。徳蔵おじは大層な主人(あるじ)おもいで格別奥さまを敬愛している様子でしたが、度々(たびたび)林の中でお目通りをしてる処を木の影から見た事があるんです。そういう時は、徳蔵おじは、いつも畏(かしこま)って奥様の仰事(おおせごと)を承(うけたまわ)っているようでした。勿論(もちろん)何のことか判然聞取(ききとれ)なかったんですが、ある時茜(あかね)さす夕日の光線が樅(もみ)の木を大きな篝火(かがりび)にして、それから枝を通して薄暗い松の大木にもたれていらっしゃる奥さまのまわりを眩(まばゆ)く輝かさせた残りで、お着衣(めし)の辺を、狂い廻り、ついでに落葉を一と燃(もえ)させ

て行頃(ゆくころ)何か徳蔵おじが仔細(しさい)ありげに申上るのをお聞なさって、チョット俯向(うつむ)きにおなりなさるはずみに、はらはらと落(おっ)る涙が、お手にお持(もち)なさった一と房の花の上へかかるのを、たしかに見た事があるんですが、これをおもえば、徳蔵おじの実貞(じってい)な処を愛して、深い思召(おぼしめし)のある事をおおせにでもなったものと見えます。おもえばあのように陰気で冷淡(つれなさ)そうな方が僕のようなものを可愛がって下さるのは、不思議なようですが、ほんとうにそうなんでした。よく僕は奥さまの仰しゃる通りに、頭を胸へよせ掛けて、いつまでか抱(だか)れていると、ジット顔を見つめていながら色々仰(おっしゃ)ったその

言葉の柔和さ！　それからトントン赤子でもあやすように、お口の内で朧（おぼろ）におっしゃることの懐（なつ）かしさ！僕は少（ちい）さい内から、まじめで静かだったもんだから、近処のものがあたりまえの子供のあどけなく可愛ところがないといい〳〵しましたが、どうしたものか奥さまは僕を可愛やとおっしゃらぬ斗（ばか）りに、しっかり抱〆（だきしめ）て下すったことの嬉しさは、忘れられないで、よく夢に見い見いしました。僕はモウ先（せん）から孤（みなしご）になってたんだそうでお袋なんかはちっとも覚えがないんですから、僕の子供心に思うことなんざあ、聞（きい）てくれる人はなかったんですが、奥さま斗りには、なんでも好（すき）なこ

とがいえたんです、「いいからどんなことでもかまわずお話し」と仰しゃるもんだから、お目に掛ったその日は木登りをして一番大きな松ぼっくりを落したというような事から、いつか船に乗って海へ行って見たいなんていう事まで、いっちまうと、面白がって聞(きい)ていて下すったんです。

　時々は夢に見たって色々不思議な話しをして下すった事がありました。そのお話しというのは、ほんとうに有そうな事ではないんでしたが、奥さまの柔和(おとなし)くッて、時として大層哀(あわれ)っぽいお声を聞くばかりでも、嬉しいのでした。一度なんぞは、ある気狂い女が夢中に

成て自分の子の生血を取てお金にし、それから鬼に誘惑されて自分の心を黄金に売払ったという、恐ろしいお話しを聞いて、僕はおっかなくなり、青くなって震えたのを見て「やっぱりそれも夢だったよ」と仰って、淋しそうにニッコリなすった事がありましたッけ。マアどれほど親切で、美しくッて、好い方だったか、僕は話せない位ですよ。話せればあなただってどんなに好におなんなさるか！　非常に僕を可愛がって下すったことを思い出してさえ、なんだか涙が眼に一杯になります。モウ先のことだけれど、きのうきょうのように思われますよ。ホラ晴た夜に空をジット眺めて

ると初めは少ししか見えなかった星が段だんいくらも
いくらも見えて来ますネイ。丁度（ちょうど）そういうように、ぼんやりおぼえてるあの時分のことを考うれば考えるほど、色々新しいことを思出して、今そこに見えたり聞えたりするような心持がします。いつかフト子供心に浮んだことを、たわいなく「アノ坊なんぞも、若さまのように可愛らしくなりたい」といいましたら、奥様が妙に苦々しい笑いようを為（なす）って、急に改まって、きっぱりと［＃「きっぱりと」は底本では「きつぱりと」］「マアぼうは、そんなことを決していうのじゃありませんよ、坊はやっぱりそのままがわたしには幾（いく）ら好（いい）のか知れぬ、

坊のその嬉しそうな目付、そのまじめな口元、ひとつも変えたい処はありませんよ。あの赤坊(あかんぼう)は奇麗(きれい)かは知りませんが、アノ従四位様のお家筋に坊の気高(けだか)い器量に及ぶ者は一人もありません。とにかく坊はソックリそのまま、わたしの心には、あの赤んぼうよりか、だれよりか可愛くッてならないのだよ」と仰有(おっしゃ)って、少しだまっていらっしゃると思ったら泣出して、「坊はね能(よ)くお聞(きき)よ。先におなくなり為(なす)って、遠方の墓に埋られていらっしゃる方に、似てるのだよ。ぼうもねその方の通りに、寛大(ゆったり)して、やさしくッて、剛勇(つよ)くなっておくれよ」。こう聞いて訳もなく悲しくなって、す

すり泣しながら、また何気なく、「アアその墓に埋ってる人は殿さまのようにえらいお方？」というと、さも見下果たという様子を口元にあらわして、僕の手を思い入れ握りしめ、「どうしてどうしてお死になされたとわたしが申た愛しいお方の側へ、従四位様を並べたら、まるで下郎を以て往たようだろうよ」と仰有ってまたちょっと口を結び、力のなさそうな溜息をなすって、僕のあたまを撫ながら、「坊もどうぞあの通りな立派な生涯を送って、命を終る時もあのようにいさぎよくなければなりません。真の名誉というものは、神を信じて、世の中に働くことにあるので、真の安全

も満足もこの外に得られるものでないと、つねづね仰(おっしゃ)ったことを、御遺言として、記憶しておいで」と、心を一杯籠(こ)めて仰ったのを、訳はよく分らないでも、忘れる処か、今そこでうかがったようにおぼえているんです。

いつかはまた、ちょっとした子供によくある熱に浮されて苦しみながら、ひるの中(うち)は頻(しき)りに寐反(ねがえ)りを打って、シクシク泣(な)いていたのが、夜に入(い)ってから少しウツウツしたと思って、フト眼を覚(さま)すと、僕の枕元近く奥さまが来ていらっしゃって、折ふし霜月(しもつき)の雨のビショビショ降る夜を侵(おか)していらしったものだから、見事な

頭髪からは冷たい雫が滴っていて、気遣わしげなお眼は、涙にうるんでいました。身動をなさる度ごとに、辺りを輝らすような宝石がおむねの辺やおぐしの中で、ピカピカしているのは、なんでもどこかの宴会へお出になる処であったのでしょう。奥さまの涙が僕の顔へ当って、奥様の頬は僕の頬に圧ついている中に僕は熱の勢か妙な感じがムラムラと心に浮んで、「アア〱おっかさんが生ていらっしゃれば好いにねえ」というのを徳蔵おじが側から「だまってねるだアよ」といいましたツけが、奥様が「坊はわたしが床の側に附ていて上ればおんなじじゃないか」とおっしゃったのを、

僕がまた臆面なく「エエあなたも大変好だけれど、おんなじじゃないわ。だっておっかさんは、そんな立派な光る物なんぞ着てる人じゃなかったんだものを」というと、それはそれは急にお顔色が変ったこと、ワットお泣なさったそのお声の悲そうでしたこと。僕はあんなに身をふるわしてお泣なさるような失礼をどうしていったかと思って、今だに不思議でなりませんよ。そしてその夜は、明方まで、勿体ないほど大事にかけて看病して下すったんです。しかし僕はあなたが聞いて下さるからッて、好気になって、際限もなく話しをしていたら、退屈なさるでしょうから、いい加減にし

ますが、モ一ツ切り話しましょう。僕はこの時の事が悲しいといえば実に何ともいえないほど悲しいんですが、またどことなく嬉しいような処もあって、判然覚えているんです。丁度しわすのもの淋しい夜の事でしたが、吹(ふき)すさぶその晩の山おろしの唸(うな)るような凄(すご)い音は、今に思出されます。折ふし徳蔵おじは椽先(えんさき)で、霜(しも)に白(しら)んだ樅(もみ)の木の上に、大きな星が二つ三つ光っている寒空をながめて、いつもになく、ひどく心配そうな、いかにも沈んだ顔付(かおつき)をしていましたッけが、いつか僕のいる方を向て、「ナニ、奥(おく)さまがナ、えらい遠方へ旅に行(いら)しッて、いつまでも帰らっしゃらないんだから、

逢（あい）に来（こ）いッてよびによこしなすったよ」と気のなさそうにいいました。何か仔細（しさい）の有そうな様子でしたが問返しもせず、徳蔵おじに連（つれ）られるまま、ふたりともだんまりで遠くもない御殿の方へ出掛（でかけ）て行ましたが、通って行く林の中は寂（さびし）くッて、ふたりの足音が気味わるく林響（こだま）に響くばかりでした。やがて薄暗いような大きい御殿へ来て、辺の立派なのに肝（きも）を潰（つぶ）し、語らえばどこまでもひびき渡りそうな天井を見ても、おっかなく、ヒョット殿さまが出ていらしッたらどうしようと、おそるおそる徳蔵おじの手をしっかり握りながら、テカテカする梯子段（はしごだん）を登り、長いお廊下を通って、漸（ようや）

く奥様のお寝間へ行着ましたが、どこからともなく、ホンノリと来る香は薫り床しく、わざと細めてある行燈の火影幽かに、室は薄暗がりでしたが、炉に焚く火が、僅か燃残って、思い掛けぬ時分にパット燃上っては廻りを急に明るくすると思えば、また俄かに消失せて、元の薄暗がりになりました。僕は気味悪さに、ただそこここと見廻している斗りでしたが、「モット側へおより」と徳蔵おじにいわれて、オジオジしながら二タ足三足、奥さまの御寝なってるほうへ寄ますと、横になっていらっしゃる奥様のお顔は、トント大理石の彫刻のように青白く、静な事は寝ていらっしゃるか

のようでした。僕はその枕元にツクネンとあっけにとられて眺めていると、やがて恍惚とした眼を開てフト僕の方を御覧になって、初て気が着て嬉しいという風に、僕をソット引寄て、手枕をさせて横に寐かし、何かいおうとして言い兼るように、出そうと思う言葉は一々長い歎息になって、心に畳まってる思いの数々が胸に波を打たせて、僕をジット抱〆ようとして、モウそれも叶わぬほどに弱ったお手は、ブルブル震えていましたが、やがて少し落着て……、落着てもまだ苦しそうに口を開けて、神に感謝の一言「神よ、オオ神よ、日々年々のこの婢女の苦痛を哀れと見そなわし、

小児（こども）を側に、臨終を遂（とげ）させ玉うを謝し奉（たてま）つる。いと浅からぬ御恵（みめぐみ）もて、婢女の罪と苦痛を除き、この期（ご）におよび、慈悲の御使（おんつかい）として、童（わらべ）を遣（つか）わし玉いし事と深く信じて疑わず、いといとかしこみ謝し奉る」と。

祈り終って声は一層幽（かすか）に遠くなり、「坊や坊には色々いい残したいことがあるが、時迫（せま）って……何もいえない……ぼうはどうぞ、無事に成人して、このちどこへ行て、どのような生涯を送っても、立派に真の道を守（まもっ）ておくれ。わたしの霊（たましい）はここを離れて、天の喜びに赴（おもむ）いても、坊の行末によっては満足が出来ないかも知れません、よっくここを弁（わきま）えるのだよ……」。

仰って、いまは、透き通るようなお手をお組みなされ、暫く無言でいらっしゃる、お側へツッ伏して、平常教えて下すった祈願の言葉を二た度三度繰返して誦える中に、ツートよくお寐入なさった様子で、あとは身動きもなさらず、寂りした室内には、何の物音もなく、ただ彼の暖炉の明滅が凄さを添えてるばかりでした。子供ながらもその場の厳かな気込に感じ入って、佇んだままでいた間はどの位でしたか、その内に徳蔵おじが、「奥さまはモウおなくなりなさったから、お暇しなければならない、見納にモウ一度お顔をよく拝んでおけ」と声を曇らしていいました。僕は死ぬ

るという事はどういう事か、まだ判然分らなかったのですが、この時大事な大事な奥様の静かに眠っていらっしゃるのを、跡に見てすすり泣きしながら、徳蔵おじに手を引(ひか)れて、外へ出た時、初めて世はういものという、習い始めをしました。

　これからあと直(すぐ)に、徳蔵おじはお暇(いとま)を願って、元(も)と出た自分の国へ引込みました。徳蔵おじはモウ年が寄って、故郷(ふるさと)を離れる事が出来ないので、七年という実に面白い気楽な生涯をそこで送り、極(ごく)おだやかに往生を遂(とげ)る時に、僕をよんで、これからは兼て望(のぞみ)の通り、船乗りになっても好(よい)といいました。僕は望が叶(かなっ)たん

だから、嬉しいことは嬉しいけれど、ここを離れて行くとなると何だか心残（こころのこり）です。ですが僕はこんなに気楽には見えてもあのように終りまで心にかけて、僕のようなものの行末を案じて下すった奥さまに対して、是非（ぜひ）清い勇ましい人物にならなくツてはならないと、始終考えているんです。